

優秀賞

自分が楽しいから農業を 新潟県新潟市立味方中学校 2年 阿部 和哉

田んぼでは稲が重そうに頭を下げている。新潟にも秋が来ようとしている。僕は畑や田んぼの色で季節がわかる。

母の実家が農家なので、僕は小さい頃から祖母の畑を手伝っている。というより隣で見てきたといった方がいいかもしれない。手伝いをしているつもりだが、幼稚園児の頃は力が弱くつる1本のさつまいもを収穫するだけで精いっぱいだった。でも、その1本のつるの中に一つだけ大きなさつまいもがあって、うれしくてはしゃいでいたのを覚えている。

本格的な手伝いは、小学校の5年生から始まった。最初は少し面倒くさかったけれど、祖母が頑張っているので自分も頑張らなきゃと思い、苗を折らないように丁寧に植えていった。

大量に植えたさつまいもを収穫するのは一仕事だった。夕方までかかり、祖母と二人でなんとか大量のさつまいもを掘り出した。そのときの達成感がすごく、とてもうれしかった。

収穫した量があまりにも多いので、家に持って帰り、さつまいも料理をたくさん作った。さつまいもはホクホクしていて、とろりと甘くとてもおいしかった。食べても食べても減らないので、お隣さんにもおすそ分けした。

自分の手で収穫したのを食べてとてもうれしかったし、おいしかった。

最初の頃は手伝いを頼まれたから祖母の畑へ行っていたが、農業を手伝っていくにつれてだんだん楽しくなってきた。特に楽しかったのがいちじくの選別や、柿山で柿を採ることだ。いちじくの選別とは重さによっていちじくを分けていく地道な作業だが、これが結構楽しかった。選別したいちじくを納品して帰るとき祖母と食べるアイスクリームもとてもおいしかった。

柿山は祖母の家から遠かったから、途中のコンビニで、おやつを買っていくのも楽しみだった。しかし、柿山は虫が多いし、草がボウボウなので小さい頃は、つまらないと感じていた。

小学校5年生になった頃には祖母の手伝いをしたいと考えていたので、自分の目に映るものも違ってきた。柿山に着くといつも大勢人がいた。小さいときは大きな大人の人と話すのは怖くてちょっと離れた所から見ていただけだったが、このときは少し話せるようになっていた。休憩のときには、この人たちがおもしろい話をして周りを和ませてくれるし、勉強になる知識をたくさん教え

てくれた。でも、一番感心したのは祖母には助けてくれる友達がたくさんいることだった。

柿山での僕の主な仕事は、柿のへたに付いている黒い色の汚れを歯ブラシで取ることだ。地味な仕事だが、やっていくうちにだんだん楽しくなり、どんどん数をこなしたくなるのだ。

祖母の手伝いはとても大変だけれど、仕事が終わったときに祖母から「手伝ってくれて、ありがとう。」と言われると、自分のエネルギーになるし、とてもうれしくなる。おこづかいをもらうより「ありがとう」という言葉が聞けた方が、とても気分がいいと思った。

祖母の手伝いをしてきて見えてきたものの一つに四季の美しさがある。稲に反射する眩しい夏の太陽。早い秋の風に揺れる茄子の実の紫。咲き残った菊に降りかかる白い雪。そして、雪が消えかかった頃の風の中に香る春のにおい。この春のにおいが一番わくわくする。これから農業が始まるからだ。さつまいも、じゃがいも、トマトに茄子。今年は何をどれだけ植えるのか、祖母と畑をするのが待ち遠しい季節だ。

僕は将来、祖母の畑を受け継いで農業をやる。農業を通して得られる達成感や収穫したときの喜びを味わいたいからだ。もちろん、収穫できた物を食べた人から「おいしい。」と言ってもらえることも農業をする喜びだが、僕はまず、自分が楽しいから農業をしようと思う。この自然の豊かな新潟の大地で、農業をやることが僕は今から楽しみだ。

将来、農業をやりたいというとないていの人から驚かれる。

「なんで、農業？」

「重労働なんじゃない？」

「他の職業がいいんじゃない？」

などと聞かれることもたくさんある。友達に公務員がいいとかユーチューバーになるとかあるいは平凡な会社員がいいとかいうが、僕は農業がいい。自分が植えた作物が育っていく様子を見たり、実をつけていく過程を見たりすることが楽しいからだ。「楽しいこと」をしているときは時間を忘れてしまう。畑にいと、気がつくと夕方になっている。そんなときは「もう夕方か」と思うとともに達成感もこみあげてくる。

今年もまた豊作の秋が来る。さつまいもを祖母と掘り出すのが待ち遠しい。